海外学界ニュース

第二十九回パリ国際東洋学者会議に加わって

佐々木現順

本会議は東洋学に関する会としては最大のものであって四年に一度、世界のいづれかの国で開催せられる。本年（一九七三年）はパリに於て七月十六日―二十二日にわたる一週間昼夜をかけて行われた。

一、会の全貌

全世界から集った学者は五千人を下らないといわれたが、私も幸い参加して研究発表の機会を得たのでその素描を記録しておきたい。ついでにパリ会議後、ヨーロッパ諸国を訪ねて見聞したことの若干をインド学・佛教学に関係させて合せ記しておき、将来、若き学徒の研究方向決定の資料としたい。

本会はフランス大学教授・アジア研究所長 René Labat を会長となし、アジア研究所副所長 Cohen、高等研究所教授 Hambis、同じく Jean Filliozat を副会長として開かれている。国家としてはフランス政府が大体的に便宜を与えていたことは羨しい。例えばパンテオンを初め各種の博物館及び音楽会は会員には無料で開放せられていた如きその一端である。近時、国際会議という名前が流行のように横行して二・三名の外人が入っても国際会議とよばれる我国の現状ではその度に政府が援助を与えることも出来まい。本会議の如き歴史的にも古く地域的にも真に国際裡にふさわしい会議ならば、いづれの国に於ても政府の大々的援助がなされるのが常である。本会議が曾ってデリーで行われた時も私が参加していたけれどもパリ以上の政府の支援とスケールの大きい企劃が遂行されていた。尤もインドの場合はインドが東洋学の最大の資料を提供する国であるという意識も手伝ったためインド政府の力の入れようは異常なまであった。ちなみに言えば、インドが東洋研究のメッカであり、最大古代文化を有するものであり、且つ東洋学会議はあだかもインド文化研究を中心としているものでなければなるまいという自負はインド人学者の心底にある―このことは本会議特に極東をのぞくいづれの部会でも出席者の発言によって露わになっていた。

パリは近代設備の乏しい大学町なので会場にはフランス大学・ソルボンヌ・パンテオンがあてられたため諸会場を研究発表中に廻ることは容易ではない。先づ部会は十一部門に分けられた。即ち、近東・東洋キリスト教・ヘブライ・アラブ及びイスラム・イラン・中央アジア・インド・東南アジア・中国・日本及び韓国・資料図書という広範囲にわたっている。参加者は世界各国より来った学者は五千人であった。このような広範囲の参加者をえてこそ最も国際的学界という名に値するものであろ

う。先述の如く、国際学会という名が一種の流行の如き観を呈している我国では二・三名の外国人をまじえても国際的学会と言われるものと違い名実共にスケールを大いに異にしていることを知らねばなるまい。ともあれ、かかる各部門を持って開かれた学会であるから全部門にわたって報告することは不可能である。ここでは時あって出席したインド以外の部門は全部略してただ専攻を同じくする第七部門インド―古代と近代―の部会について、それも紙数の関係で全部にわたり得ないので我国の研究方向と関連して考えてもよかろうと思うところの一部のみに限定して記してみたいと考える。この部門は更に専門別に分けられて美術と建築・佛教・ドラヴィディアン・ヒンドゥイズムとジャイニズム・歴史・科学史・言語学・現代インドアーリヤン文学・サンスクリットとプラクリット・インドマニュスクリップト・哲学・ヴェーダの十二専門となっていた。但し幸い発表の場所はソルボンヌとパンテオン及び高級研究所であったのでその間を往復すればいくらかは聞きえた。それにしても同時で別々の所で行われるので熱心な学徒は多忙をきわめたようである。この種の国際学会ではかかる場合、互にレジメを依頼し合っている風景も見られたが、発表の経験からして、自分の原稿のレジメをいくらか準備しておくことが必要であろう。私も友人学者から予約されていたのでいくらかは準備してあり幸いであったが今後、発表する人々のために一言記しておいた次第である。

二、古代インド研究

古代・近代インド研究の発表者は一七一名にのぼった。その中、美術・考古学に関して二・三の興味あるものをあげると Mallmann の「タントラ佛教に於けるサラスヴティー観点」がありアミダ佛の智慧とサラスヴティーの比較をする。M. K. Leese はカンヘーリに於けるミロクについてその彫像を分析し、K. Vatsyayan は東南アジヤ美術に於けるモーテーブとして切れ長の目・飛天・舞踊の三点をあげて統一的見解を与えた。その他、コイン・壺等の優れた考古学の研究も見られたが筆者の専門外のことであったのでここでは筆者の興味ある発表だけを記しているから決してそれは全貌でないことをことわっておく。佛教関係では古典としては時論の研究として B. Banerjee がおり、歴史的なものではインド・中国の古代に於ける交渉史として S. V. R. Char が発表したがこれらの発表課題は我国に於て屢々なされるものであって特別の新しい本大会の特色ではない。併し、本大会の特色あるものとしてはジャータカの研究が多く発表せられた。たとえば J. Filliozat のダサワットウの研究とか R. F. Gombrich のヴェッサンタラ・ジャータカなどがそれであった。スートラの研究では I. O. Gomez のガンダビューハ・スートラの研究、J. Yün-hua の法華経に於けるインド佛教的次元の研究、ネパールに於ける佛教梵語によるストウーパ原典の研究（G. Roth 教授）がある。原典を基礎とした特殊な哲学的研究としては D. S. Ruegg がラトナゴートラ・ヴ

イバーガの歴史とゴートラの意味について述べ、Ur-Ratnagotravibhāga とも言うべき原初形態の存立を提起した。チベット佛教としては N. S. Shukla が Jagaddarpaṇa と Kuladatta の時代考証をなした。

私の発表課題は Avijñapti—A Buddhist Moral Concept—であるが、これもテキスト中心の思想研究としての範疇に入れられるかも知れない。私はかかる種類の国際会議での傾向がテキスト中心であると考えているから、この感覚にそって微力をつくしてみた。内容は順正理論の研究であり、従来の倶舎論中心の理解では不充分な点が多いこと、又、誤解さえされて伝持された諸例、いままで権威とされていた一部の佛訳研究の誤謬、チベット目録（コルディエールを初めとする諸文献）の誤認を取り上げ最後に無表色の哲学的価値付けに関説した。これに対してラモート博士やアメリカのジャイニ博士（梵文倶舎論校訂者）など同調してくれた。業についての宗教的倫理的意味について一、二の質問あり、いづれも南方佛教専門家からの質疑であったが彼らの哲学的関心を知って有益であった。

三、研究方向

テキストを主とした研究方向が最も堅実な傾向であると信ずるものであるが—特に国際会議に於て—哲学的研究もみられないのではない。この研究は大体インド人学者によってなされることが多いように—いつもの国際会議でも思うことだが—考える。多分インド人は思想を研究の対象としてでなく生きる生命そのものであるからであろう。因に我国に於ても学会は多く思想的発表が多い。ややもすると主観的になりやすいし、思想は凡て民族性によって限定せられているから我国だけでは通ずるであろうが、研究としては更に客観性を持たねば他を信ぜしめることは出来まい。殊に宗教となるとたとえ、理解したとしても信ずる筈はないから、その限界を充分心得ておくことが必要でないかと考えている。佛教研究でも同じで、生きているその思想を正面からとり上げるということはどうやらインド人と日本人学徒に多いように思われる。欧米人にとっては佛教も東洋学も凡て文化なのであって、彼らを生かして行く思想ではない。曾ってマールブルグ大学のノーベル博士も、筆者に親しく話していたように回教を研究したからとて回教信者になる必要はない。かかる考え方の支配している国際会議で民族性に根をはった佛教思想そのものを開演しても意味はない。演説で終ってしまう。よくよく考うべき点でなかろうか。

尤も必ずしも原典的研究に限られたものだけではなく思想を中心とした発表もないではない。例えば H. C. Śāstri の中観哲学に関するもので、チャンドラキールティの入中論を取り上げ、又、Th. I. Kneupper はマツハと佛教との比較研究として「我」の問題に焦点をあてている如きである。「我」について彼はアメリカの N. P. Jacobson の説に同調しつつ、西洋の科学哲学と佛教の非科学的精神文化の支流を指摘している。併し、先述した如く、かかる思想を中心とした研究は極めて主観的と言ってよいから発表後に多くの質疑と反論が続き果てしない論

諍となるのが常である。W. Pachow（アメリカ・アイオア大学）の佛陀論（Gautama Buddha: Man or Superman?）の如き発表は厳しい反論に会った。

インドに於ける正統な学問的伝統は言うまでもなく、ヴェーダやウパニシャッド研究であるにもかかわらず今回はそれに関する発表は比較的少くない。その中で印象的であった研究はバンダルカル研究所長の R. N. Dandekar のヴーイシュタがヴェーダ時代の宗教思想に与えた貢献についての研究であった。特にこの研究は新しい角度を斯界に与えた。また国際人としての彼の応答ぶりも堂に入ったものであるが、それにもまして彼の印象的であった点はテキストを中心としながら、それを越えた思想と自らの哲学との一体観であった。彼は古典研究を基礎として愈々本格的独自の思想体系を樹立する時期に入った如き感をいだかせるに充分な重厚な研究発表であった。筆者も永い間の親交をえた学者であるがいつもかかる学会で会うことが出来てなつかしいことであった。帰りにインドへ来るだろうとて招待希望など言ってくれたが今回は多用のため辞退せざるをえなかった。更に、ウパニシャッドの研究に A. Kunst が来ていた。彼は既に古く(1939)タットヴサングラハに於ける佛教論理学の研究を独文で出しているが、それ以来、現在は論理的思索をウパニシャッド思想の研究に適用して分析しはじめた。インドに出てくる業と輪廻或はウパーサナ或はシッダーンタの問題を取り上げて体系付けようとした。アビダルマ・ディーパやミリンダパンハ・ティーカの校訂者たる Jaini はジャイナと佛教に於ける bhavyatva と abhavyatva の問題を論じインドに通ずる決定論の批判的研究を発表し、佛教とインド哲学一般に通ずる広範囲の資料を駆使した。自分の専門領域であるからという理由ではないが、本部会に於ける研究の白眉であったと思う。彼はロンドン大学から移って現在はバークレー・カルフォルニア大学にいる。彼とは発表期間中、しばしば会って意見の交換をなしえたが、彼によればアメリカのインド研究の学徒も増加し、佛教特に論書期の研究に興味をもたれはじめたということでありロンドン時代以上に自由な学的好条件のもとに恵まれているようであった。私の発表内容の中で私が述べたことであるが「プサーンの顕宗論一部の佛訳は順正理論の一部であって顕宗論ではなく、また佛訳中に用いられた梵語は多くの点で適格を欠いている」という私の意見を彼は是認し、それはあなたのベナレス時代からの自論でしたねといったりして、順正理論研究の交換を強く希望してくれた。

四、論理学その他

論理学の面では K. Bhattacharya, S. Bhattacharya などがあり、認識論の研究では M. M. Mehta が大乗佛教とヴェーダーンタの比較研究を発表した。

文法学では S. Al-George のパーニニ研究及び O. V. Hinuber によるパーリ語に於けるアオリストの研究等がある。

五、写本研究

国際会議で我々が期待する一つの特色はマヌスクリップトに関する研究発表であると言える。写本など原本的資料の得がたい我国に於ける状況を思う時、それへの興味は一層高い。この見地からしてかかる発表は我々の学界で余りない特色であろうかと思う。その点で S. Sengupta によるギルギット発見の未刊の写本の研究は注目すべきである。その中で有部の Abhidharma-dharma-skandhapādaśāstra の紹介及びアビダルマ佛教の宇宙論を伝える写本の紹介は多くの期待を興さしめた。それらは佛教文献の中では極めて珍らしい発見であるからである。又、同じく写本の研究として A. K. Warder はインドで一九七二―三年の間に探索した成果を発表した。これは彼の著書 Indian Kāvya Literature (Vol. 1, 1972) を完結ならしめる為の研究成果である。彼は周知の如く PTS から Introduction to Pāli とか Pāli Metre を出版したり、インドからは大著 Indian Buddhism を出したりして矢つぎ早に有益な成果を世に送っている原始佛教学界のホープである。私はロンドンでＰＴＳ協会のホーナ博士に会った時、パリのこの学会に彼の来ていることを知らさせ是非、詳細の研究交換をするよう言われたため彼の研究発表を注目し、色々な斯界の課題と研究方法を談合する機を持てたことは幸いであった。同じく写本であるがジャイナのものとして、ラヂャスタンに保管された一群の写本の発表が Motital Gupta によってなされた。ジャイナ研究は我国に於ては殆んど皆無といってよいほどの状況であるが、インドではヴェーダ研究につぐ勢力を持っていることは言うまでもなく、西洋に於ても特にドイツで盛んであり、その成果はハンブルグ大学のアルスドルフ門弟によって世に出たものが多い。ジャイナ研究はインド本国は別として、少くとも国際的には佛教以上の重要な地位を占めているものである。それはインドに於ては生きている宗教であるからであろう。我国に於て、ジャイナ研究が殆んどないのはジャイナ教は思想としてもヴェーダの如く根本的思想ではなく、又、宗教としても日本に如何なる形によっても伝えられることがなかったという現実的観点からジャイナへの関心がうすいのではなかろうかと思う。但し、佛教思想の発生・交流からしても、又、国際的舞台で活躍する機会の多い分野であるという点からしても是非、この方面の研究者の出現が心要であろう。我々の如き狭い佛教の原典研究に把えられてしまっている現状でも、ジャイナ教との交流なしにこれから切断された佛教独自のものと考えてしまうことにいくらかの不安をいだくものである。だからといって協同研究するに充分な学徒も得がたいため、欧米学者との間の私的交流を通じて意見を伺わねばならないという事情にある―しかし、かかる嘆きは私一個の極めて主観的な嘆きに過ぎないかも知れない。

六、近代インド

以上は古代インドの研究発表であり、而もその若干に過ぎないが、近代インドに関しては紙数の関係で割愛しなければなら

ない。それにもかかわらず、一・二点だけ注意しておきたいと思う。即ち、インド現代の研究にも過去十数年の間に著しい変化が見られた。十年前までは現代インド人による歴史研究は、英国支配下のインドを近代国家として見なおそうとする態度であって母国インドという強い印象を持った。だから学者といえどもその語句に感情的反撥を示す強い批判的英語が用いられていた。グプタ・バネルヂー・マジュンダール等の歴史学者・社会学者ですらもそうであった。又、インドには歴史学者と社会学者というものの区別が明瞭にされていなかったように思われた。併し、今やかかる反英的歴史観の樹立は終った。他方、現代インドを西洋の尺度で理解しようとする傾向が外国人によってなさた風潮が見られた。即ち、マックス・ウェーバー的方法である。しかしウェーバーはインドの内面に深く通じているわけでもなく思想と現実を区別しえた学者でもないから、その成果は西欧人には大体見当はついたけれど所詮インドそのものとは思われなかった。我々――といっても私的な考えだが――はもはやウェーバーのインド社会学研究を必ずしも全面的には支持し得ないと信ずる。インド人自身の手によるインド社会学の樹立こそ世界の期待するところでないかと思う。最後の段階即ち現在はどうなのかというのが、この学会で私の期待したものであった。その期待からみると現代インド研究は全く新しい十九世紀以後の政治問題に集中してはいたが、過去の思想との連関に於て少々納得出来ない節もあった。併し、我々の期待通り、インド人による新しい社会学樹立の野心的発表が見られたのはたのしいことである。例えば R. Kothari のインドの社会科学に於ける価値とその諸範例とか M. Desai のインドのブルジョアジーの間にみられるナショナリズムの諸様の形態の研究などがそれである。これらの諸問題はインドに住居せるインド人学者にしてはじめて成しとげられる研究であって、どの西洋人の研究よりも我々には説得力を持っていたように思った。

又、新しい点は従来のインド社会は主としてヒンドゥーによって出来上った社会の研究が多いようであったが、元来近代インド社会はマソリムによる文化的経済的貢献が多かったものである。然るにこの点が政治的理由もあって、従来は表面に余り出ていなかった。このことはかねがね残念に思っていたことであったが今回の国際学会ではかなり広く且つ論究が遂行されていたことは新しい未来への展望を開示したようである。例えば M. Haq が Muhammad Ismail のインド政治に於ける役割を論じ S. Malik がマソリム・ナショナリズムの歴史的文献を分析した如きである。又、社会学樹立への意欲の表われとして追加的に記しておきたいことは地域社会の分析であり、従来、外部からの人ではみおとし勝ちな階級性の意味を考えたことである。R. K. Jain による発表もその一つであるが彼は Kisān と Bundelā の社会的階層の存在とその分析であった。これなどは北部中央のインドに巣くう強い農民の心理をえぐったものであり、それの社会学的意味付けであって単なる外から持って来たような比較社会学の皮相なアプローチでは近よれない研究であった。我々はこのような心理的思想的背景とその社会学的形

態化との関係がインド人自らの手によって遂行されたはじめたことこそ高く評価したいのである。

七、国際市場

この種の学会は学問交流の場であるということが屢々言われる。併し、現在では単なる交流に止まらない。研究の売買さえ即席で行われる。科学関係の学会はいざ知らず今日では人文科学方面にでも、それが現われて来ている。即ち、各部会に集まる人々は単に聴講するというだけではなく、足しげく次ぎ次ぎと聴いて廻る。特に研究所をかかえている責任者の間にこの風潮が見受けられた。彼らは目ぼしい必要な発表があればその会議後、直ちに研究資料の貢献を申し出る。従って彼らはいそがしく学者をたづね廻っている。パーリ語に関していえば英国のケンブリッヂでやっているパーリ語大辞典編集事業或はデンマーク王室でやっているパーリ・クリティカル・ディクショナリの大事業の関係者の如きその一例である。会議後、委員会を開き研究発表者の中から必要な研究を選び出し、研究書と同時に資料一切の援助を求める。帰国したら直ちに私のところにもケンブリッヂ大学やデンマークその他の研究所から従来の論文を全部欲しいということであったが、特に言語研究の面で参考資料として用いるようである。これは栄誉あることではあるが、誠に迅速な契約にはおそれ入った次第である。こうした学問尊重の気風或は学問の即売は西欧的学界の特色でないかと思う。科学では不思議ではなかろうが、精神文化の領域に於ても金銭で価値付けが行われるということである。知識はやはり売り物でなければならず、著書もまた売るためのものであるから商品のペースに乗るように書くべきであるということはアメリカの常識になっているが、やはりこの学会でもそれがみられた。私は幸い突然そのようなバイヤーを得たので愈々アメリカ的コンモディティーの考えが欧米にあることをたしかめえた。因に言うがデンマークでやっているユネスコの所謂パーリ語のＣＰＤ大辞典には多くの国が参加している。――日本もその計画希望をしたが――一向に何の成果も送られていないというのである。真実の程は知らぬがともかく国際的協同研究だけは空手形で終らない。余程の実力が必要であることを凡ての人が知って欲しいと思った。でないととんだ国際的恥をかくことにもなりかねない。つまり国際学会は単なる発表の場でなく、売れるものの発表会だということである。International Market だと思ってみることも張り合いのあることでないか。

尤も学問発表は必ずしも即売に限らず、文字通り資料の交換もある。友情という点で感激したことはベルギーのラモート博士が私の発表にも出席され、一部しかない近著の抜刷をわざわざ残して持って来て下さったことであった。ウパデーシャの研究であるが、(Der Verfasser des Upadeśa und seine Quellen, 1973) いづれ何かに紹介して好意にむくいたいと思うことである。

また長年の間、交流あったパリ大学の André Bareau 教授に久しぶりで合った。彼は律以後のストゥーパの文化史的研究の

一部を完遂していた論文を持って来られた（La Construction et le culte des Stūpa, 1962）。彼は現在、佛教美術、特にストゥーパ等の資料から大乗・小乗の関係を研究しつつあって一書を出したいと語っていた。ただ英語が聞けないので英語の発表の多いこの学会は仲々骨がおれると言っていられた。

以上、大会の極めて一部を紹介して来たが、本会で私のたのしかったことは学問上の知己をえたことだけでなく、古い曾つての先生、同僚達と会うことが出来たことであり、それらが皆、仲々の精力的仕事を出しているのを知ると同時に自らの不勉強を恥じ入った次第である。国際学会にはどうやら常連といっても良い学者が集って来るらしい。町かどで、声だけでわかったといって立ちどまって待っていてくれたような親しい学者らもいた。何かしら我国のどこにいるよりも友をえたという実感が湧いたことである。そのような思出を秘め、かなしみをいだいてパリをあとにした。

八、英・独・イタリー諸国

パリの町も異例の暑さであったし、それに緊張した学会発表を無事終って、数年前までいたヨーロッパの古巣を又々たずね歩いてみた。肩ぐるしい学会誌で言うことをはばかるべきだが、今回は秘書のつもりで娘を同伴したが遂に秘書らしい役目も果さずじまい。でも、学会発表にいつも神妙にすわり続けていた慰労の意味でイタリーを手はじめに一諸に見学に出かけた。娘が世界の大先生の誰れ彼れを選ばず、恐れもせず、平気で話したりしているのを見て、盲人蛇におじずのことわざを思い出す。それより一層近頃の若者の厚顔に舌をまいた。そこで思うに、これだけの横着さは今の若者に共通した特性だということである。これに学問的知識を身につけさせれば今後、国際場に出て活躍し研究発表におじけもつかないであろうことは間違いない。惜しむらくは学問しないことだ。だが、若者の将来は学問的にも期待してよいものであろうと思う。

ベルリン自由大学教授のシュナイダーは曾つて私がハンブルグ大学にいた頃の学生であるが、そこで一週間ほど骨休みし、ベルリンのフルシュテンダムあたりをぶらついて夕べを充分エンジョイした。学問的にはベルリン自由大学のインド哲学教授C. B. Tripāṭhī の学殖に驚いた。教授はトルファン発見のニダーナ・サミユクタや律の研究を出版して有名であるが、近くはKarmavibhaṅgōpadeśa und berliner Texte, 1966 なる論項を出し（WZKSO, Band X. 1966）又、トルファン発見の増一阿含梵文と漢蔵対照研究を殆んど完成し更に漢訳の英訳を私に依頼して、その熱に引かれて引受けてしまった。佛教学研究者に会うことは珍らしいので非常に人なつこく、家庭によばれて久しぶりで、インドとヨーロッパの両方の料理でもてなされた。ドイツ婦人と二人の娘がおり、インドの名前を佛教からとり、マヤとヤソダラという娘さんであった。飛行場までも全家族で見送りに来て貰ったりしたが、ともかく九年間のヨーロッパ生活できたえた科学的方法論に加えてインド本国でのジャイナ研究という予備知識を持った佛教学者であるから、我々にとって

は最も信頼すべき学殖をもった学者であるという印象を与えられたことである。

ベルリン大学には、ハーバード大学出身のドイツ人 Wagner がいる。彼は現在、中国佛教を社会学的見地で研究している。慧遠と羅什の交流に関する論項がある（Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 31, 1971）。ベルリン大学は政治色が極めて強く、現代及び古典の社会学的研究が重視されていた。彼らによればベルギーのプサーンは全く弟子一人も持たず、大学に教職を持ったこともなく、フレンミッシュ語をベルギーで用いず、フランス語だけで独りで研究していたとのことでその倶舎論佛訳だけの仕事しかないが、その仕事は現代でも、古典思想に於ても何の意味があるかという厳しい批判を吐露していた。この批判はプサーンをよく知らない我国では意外な批判であろう。諸所で同じ考えを聞いたが、間違もなさそうな話である。

ハイデルベルグ大学のヘルマン・コップ博士はパーリ語辞典と原始佛教研究をやっているが最近出来たアジア研究所にいられて依然として篤実な研究を主して辞書編集のために遂行していた。日本で入手困難な参考資料を必要なもの全部コピーしてくれた。英国のホーナ博士は新しい住所にパーリ協会を移し、依然として研究の権化であった。ノルマンがここでコンコルダンスを作っている。ホーナー博士とはもう二十年来の知己だが、又々会えた。その上、今度はＰＴＳ出版の註の見出し方など具体的に学びえた。私は七年来、ＰＴＳ出版を期して Sārasaṅgaha を受け持って続けているが仲々専念する時間もなく催促されて恥入った次第である。

ハンブルグ大学はジャイナ教の研究から故ベルンハルト教授による佛教学の樹立を経て、現在はシュミットタウゼン教授がインド学の発展を企劃している。講義は佛教学関係のものが大部分を占めている。詳細は留学中の本学出身の田端哲哉君の報告によって既に読者も知っている通りである。シュミットタウゼン教授は若い学徒であるが将来、ドイツの佛教学の第一人者となるであろう。天才的な頭脳と優れた語学力を兼備している。Pramāṇaviniścayaḥ のサンスクリット断簡の研究や瑜伽行派の文献史等の論項が多く非常な情熱を持ったドイツのホープである。幸い大学の Dozenten として大学に籍をおく田端哲哉君は同教授の信頼がことの外厚く研究面でも相互に益するところが多い。同教授及びベンル博士自ら田端君を絶讃していた。本学の名誉でもある。ドンブラーディ教授も田端君の善き指導者であり同君の二年留学を四年に引き延ばしてまで研究の協力者たらしめている。パリーの国際会議に田端君も南下してドイツより参加し、終始私の研究発表その他一切の雑事を助けてくれた。記して謝意を表したい。

その他、ウィーンの Steinkellner も健在であり、涅槃経の研究等を発表した。現在アメリカのフィラデルフィヤにおる。ウィーンに最近、佛教・チベット研究の講座が設けられてその重要な地位につき佛教研究をかためている。因に大学を引退したフラウワルナー博士の近々の便りによれば、博士は現在終生の仕事として諸論文の集大成とインド史に没頭している。北伝

アビダルマ研究は博士によって初めてヨーロッパでやり始められた。注目すべきことでもあり、アビダルマ研究の将来のためよろこばしい傾向である。

九、むすび

以上、国際東洋学者会という広範囲の学会の極めて一部を紹介してみた。省みるとき、ともかく我々研究者は特に外国を対象とするインド・佛教学の研究者は常に日本だけのものではないという意識を離れてはならないであろう。ということは内にあっては常に外国文献に注意し、外にあっては出来るだけ外国に出かけて斯界の人々と交流し、国際的問題意識を身につけるように心がけねばならない。問題意識は単に「考え方」といった抽象的なものばかりではなく、もっと深くその「生き方」というものを出来るだけ身につけることであろう。問題にとりくむという理性的なるものは同時に生活そのものから出てくる現実的なるものであるからであり、又、現実的なるものは同時に理性的なるものでもあるからである。そのことが渾然と一体になっているところにヨーロッパの精神があるのではないであろうか。

私は国際学会に屢々参加したがその度に今さらの如く晴ればれとした生きている悦びを味わったものである。併し今は四年後にならないと行われない学会のためにまたまた洞穴に入って Einsiedler にならねばならないであろう。